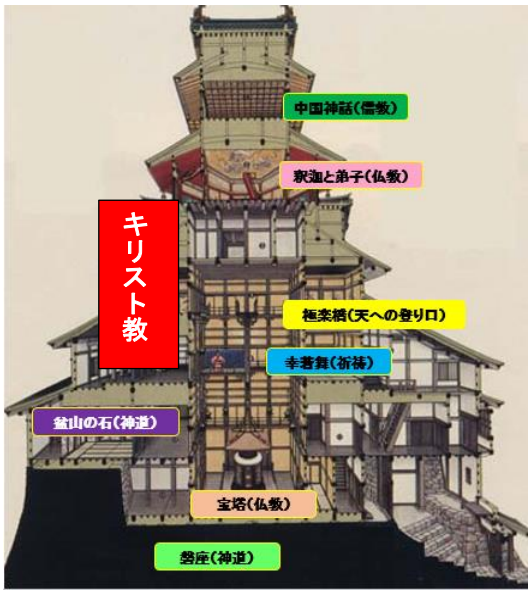
会報　新安土日記第３号

NPO 法人安土城再建を夢見る会
平成 30 年 9 月 30 日

滋賀から日本再生に向け、安土城再建を通じて
国際観光都市「安土・近江八幡市」を実現しよう！



当会では長年、真実の安土城を調査・研究してきました。その結果、安土城ＶＲや安土城郭資料館の縮小モデル（内藤昌氏案）が概ね正しいという結論に至りました。特徴的なのはキリスト教の天主堂を模した**吹抜け構造**です。全ての宗教を包含した考え方（天道思想）をもとに造られた建造物が安土城であり、信長はその上に君臨しようとした。その政治姿勢が本能寺の変につながったと考えられます。内部構造は神道、仏教、儒教、キリスト教の要素が入っており、中央部の舞台では信長が**「天下統一祈りの舞（幸若舞：敦盛）」**を舞っていた。信長の先祖は越前織田剣神社の神官で「火起請」という呪術をしており特殊な能力があったようです。

最近斜め瓦が発見され、一階の壁＆屋根構造が特定されました。内藤案のみが適合しており、宮上氏、佐藤・三浦氏の案（一階の武者走り構造）は出土したものと合わないことがわかりました。

また、信長は合理性を重んじた半面、晩年は自分自身を神の化身と考えていたようで、**信長の誕生日をキリストのクリスマスにならって記念日にし、民衆に摠見寺から天主（信長）を拝むように命じていた。**しかも幸若舞の敦盛には以下のセリフがあり、信長の人生観が集約されている。二十歳前に家督相続してから３０年間、いつもこのセリフを口ずさみながら舞っていた。安土城でも何百回も舞っており、本能寺の変でも「人間五十年～是非に及ばず」と天下統一を願って死んでいっただろう。

＜幸若舞「敦盛」（信長の天下統一祈りの舞）＞

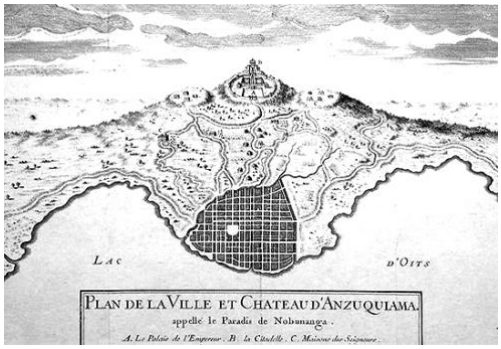
人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢幻の如くなり、一度生を享け、滅せぬもののあるべき
死のうは一定、しのび草には何をしよぞ、一定かたりをこすよの
「人は生きていられる時間は限られている。だからこそ、後世にまで語り継がれる様な、自分の″生きた証″をこの世に残そう。」という意味であり、信長にとっては安土城が生きた証であった。

安土城の構造を見ると、宝塔及び盆山の石へ祈りをささげ、キリスト教の吹抜けの空間の舞台で幸若舞を舞って身を清めた後、極楽橋（人間界と天界の結界）を渡って仏教、儒教の空間（天界のイメ

ージ）で天下統一を瞑想＆祈り、それを現世で実行した。それが自らを「第六天魔王」（ヒンドゥーのシヴァ神）と呼ぶ行為につながる。東洋的な部分と西洋合理性の入り混じった摩訶不思議な人であった。世界中でいち早く政教分離の政策をとった人物であり、後に日本を平和な国へ導いている。かつてはキリスト教カトリックとプロテスタント、現代ではキリスト教とイスラム教の争いが絶えない。「人類を平和に導くには政教分離が大切である」と気付いた唯一の為政者であり、その本質を見抜く力には驚嘆する。この地が発信しなければならない重要なメッセージである。

だから、宮上茂隆氏が「これらの常識外れな構造は、池上右平の想像に基づくもので、奇想に値する。安土日記やルイス・フロイスの「日本史」にも書かかれていない。」といって内藤昌氏をバカにしたが、ご自分が信長という人間の勉強不足であったという結論に導かれる。

安土城址は国の特別史跡であり、しかも再建するには土地保有者の摠見寺の賛同を得るか、国・県・市等が買い上げるしか方法がない。多額の再建費用もかかるし、単に城を再建する目的だけでは進まない。再建することで近江八幡市及び周辺地域の活性化（観光・文化・産業、教育）だけでなくもっと大きな目的がないと再建する意味がない。そこで着目するのが安土城の宗教的要素である。信長は安土で宗教政策を取っており、安土宗論では仏教の宗派対立（浄土宗と法華宗）を浄厳院で諌めたり、キリスト教の布教も認めて安土セミナリヨ（学校）建設に多大な支援をした。浄厳院、奥石神社など各宗教へ平等に建設支援をしている。その象徴が全ての宗教の共存をイメージした摠見寺である。平和で安寧なまち、それが安土山下町及び安土城である。それがフランスに伝わって「安土の都市と城は信長の楽園」として伝承された。従って、「人類を平和に導くには政教分離が大切である」「為政者は互いの宗教を認め合い共存する」というメッセージが安土城再建をキッカケに発信できれば、信長の「一定かたりをこすよの」が実現できる。このメッセージを発信する為には、安土城天主、本丸御殿（御幸の間）、摠見寺、安土セミナリヨを再建できれば可能となる。



「信長の楽園　安土山の都市と城」

城の外観情報が少ないのでバチカンの安土山図屏風は何とか探し出したい。来年ローマ法王が訪日されるが、そのキッカケをつくった天正遣欧使節顕彰会とも連携をとって三度目のチャレジをしたい。もし、発見されれば世紀の大発見となり、歴史的価値は計り知れない。皆さん支援してください！

当会の活動は下記３名及び県・市会議員からも応援いただいています。唯一無二の歴史を変革した城を再建し、滋賀から日本再生に向け、安土城再建を通じて国際観光都市「安土・近江八幡市」を実現し、安土桃山時代の文化の中心地を皆さんで創生していこうではありませんか！

信長の第六天魔王と天守指図による城設計との比較

幸若舞「敦盛」の「下天の内をくらぶれば～一定かたりをこすよの！」の具現化が安土城である！

天道思想の具現化➡
七重の安土城（≒七宝塔）

天守指図の信憑性

＊**天守指図（静嘉堂文庫）は、加賀藩大工の池上家に伝来した資料**

池上家は尾張の出身で、信長死後に前田利家が大工を引き取った

＊1671年に池上右平が作成＆自筆署名し、それを7代目延世（のぶつぐ）が**1760年頃に透写したもの**

＊**宮上茂隆氏が「これらの常識外れな構造は、池上右平の想像に基づくもので、奇想に値する。安土日記やルイス・フロイスの「日本史」にも書かれていない。」と内藤昌氏をバカにした**が

これから説明する天守指図は、想像ではかけない。リアル！

＊吹抜けや宝塔が安土日記に書かれていないのは、工事中で見せる状態でなかったから（**安土日記は1579年1月に京都所司代の村井貞勝が書いたものだが、内装は1581年9月完成！）**